公益財団法人
パナソニック教育財団

〒105-0001　東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100　FAX.03-5521-6200
ホームページ http://www.kokoro-forum.jp/

こころを育む
総合フォーラム

こころを育む総合フォーラム

2020年度 活動報告書

公益財団法人 パナソニック教育財団

こころを育む総合フォーラム より

「こころを育む総合フォーラム」は、日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、
はじめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。

設立以来、日本人のこころのありようについて討議を重ね、
2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめ、発表しました。
提言では、家庭・学校・地域・企業の4つの分野に、
それぞれの立場で子どもたちのこころを育むことを「問い」のメッセージとして、呼びかけました。

2008年、この提言内容を全国にムーブメントとして広げていくために、
子どもたちの“こころを育む活動”を応援する、全国運動を始めました。
毎年、全国各地で取り組まれているこころを育む優れた活動を募集・表彰し、広く紹介しています。

2019年、鷲田清一を座長に、新たな体制で第二期をスタートしました。
自薦に加え、推薦での応募もできるようにすることで、より多くの活動に光があたるようにしました。

本書が、“こころを育む”環境づくりのための取り組みのヒントになり、
活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

活動の経緯

2005年　「こころを育む総合フォーラム」発足
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足

2007年　議論をまとめた「提言書」をプレス発表
発足から計18回の討議を経て、提言書を公表

2008年　「全国運動」スタート
全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む”活動の募集・表彰を開始

2011年　東日本大震災支援活動（トヨタ財団との共同プロジェクト）実施
「子どもの居場所づくりと次世代の育成」に向けた取り組みの支援を実施（～2013年）

2013年　「有識者対談」WEB連載（東洋経済オンラインとの共同企画）
山折座長を中心に有識者メンバーと「日本人としての教養～次世代に継承したいこと」をテーマに対談（～2015年）

2015年　フォーラム活動10年
東京にてフォーラム活動10年特別シンポジウムを開催

2017年　全国運動10年
10周年記念表彰式

2019年　「第二期 こころを育む総合フォーラム」をスタート
鷲田座長を中心に新たなメンバー11名でスタート

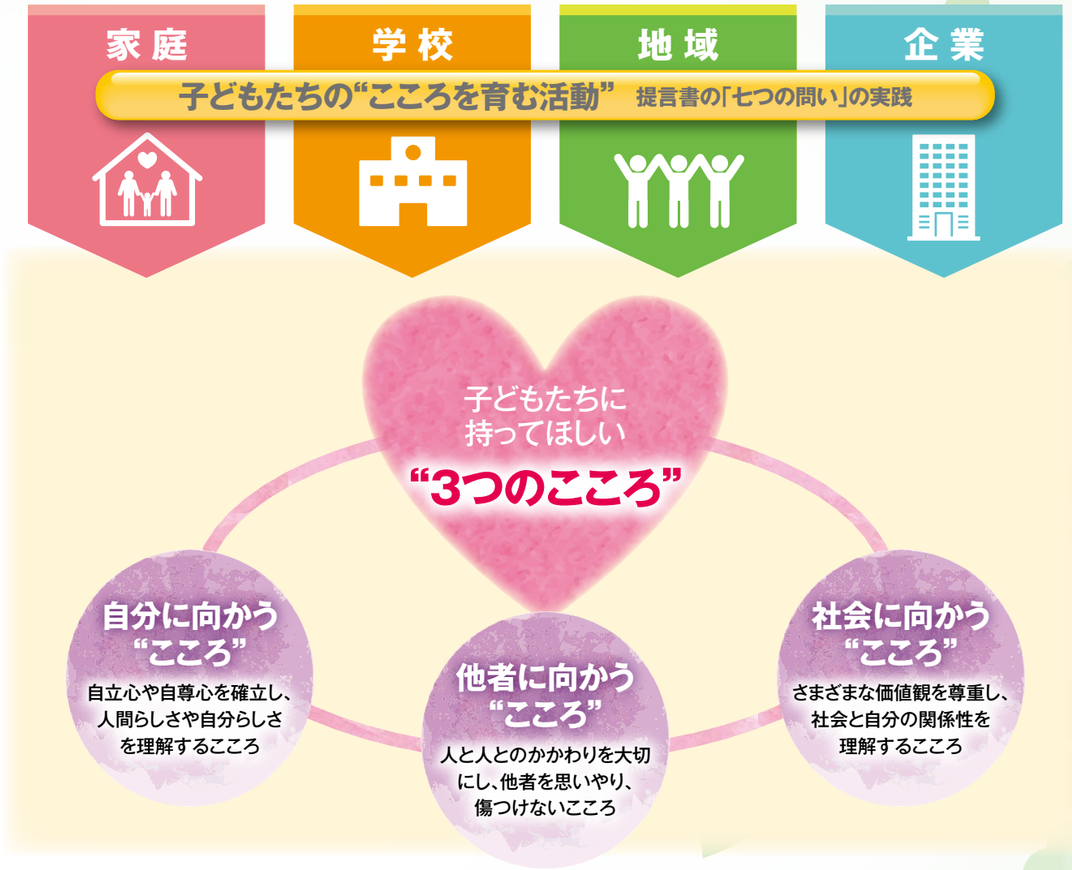
提言書

2007年、フォーラムの思いを提言書にまとめて公表しました。
家庭・学校・地域・企業の4つの分野で、子どもたちのこころの育みのために大人たちができることを、自己の内心に向かって問いかける「七つの問い」の形で呼びかけています。
具体的には、家庭に向けて「親（保護者）の姿勢が、子どものこころを創っているという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか」など、4分野それぞれに対して「七つの問い」を提案しています。

提言書の詳細は、「こころを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。
http://www.kokoro-forum.jp/project/message.php

フォーラムの目指す姿

家庭・学校・地域・企業などで取り組まれている「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、子供たちに持ってほしい“3つのこころ”をバランスよく育むことを目指しています。



こころを育む総合フォーラム メンバー

座長
鷲田 清一
大阪大学 名誉教授

市川 伸一
東京大学 名誉教授

今村 久美
NPO法人
カタリバ 代表理事

入江　杏
絵本作家、「ミシュカの森」主宰、
上智大学グリーフケア研究所
非常勤講師

小国 綾子
毎日新聞
ジャーナリスト

工藤　啓
NPO法人育て上げネット
理事長

玄田 有史
東京大学
社会科学研究所 教授

鈴木 みゆき
国立青少年教育振興機構
理事長

福田 里香
パナソニック株式会社
CSR・社会文化部 部長

増田 明美
スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学 教授

山極 壽一
京都大学前総長、
日本モンキーセンター
博物館長

2020年度 子どもたちの”こころを育む活動” 表彰式

2021年2月2日(火)、「2020年度子どもたちの “こころを育む活動” 表彰式」をオンライン（ZOOM）で開催しました。この表彰式の模様はYouTubeでも配信され、協力団体、フォーラムメンバー、当財団役員、など70名以上の皆様にご視聴いただきました。

また、表彰式に続いて、受賞団体代表者とフォーラムメンバー幹事2名によるオンライン座談会「これからの “子どもたちのこころの育み” とオンライン活用」を開催しました。

ごあいさつ・講評

当財団小野元之理事長から、コロナ禍の中で真摯に子どもたちに向き合い、地域に密着した活動をしている団体の皆様へ感謝を伝えるご挨拶の後、来賓を代表して、文部科学省総合教育政策局の寺門成真社会教育振興総括官から「これまで経験したことのない厳しい環境の中、日本の未来を担う子どもたちのために、立ち止まらずさまざまな工夫により子どもたちのこころを育む活動を続けられている団体の皆様へ敬意を表します」との温かいご祝辞をいただきました。

続いて、各受賞団体の活動を動画で紹介し、フォーラムメンバーで今年度幹事の入江杏氏（絵本作家・「ミシュカの森」主宰・上智大学グリーフケア研究所非常勤講師）より、全国大賞1件、優秀賞5件、奨励賞1件が発表されました。その後、各団体の代表に今後の抱負を発表いただきました。

主催者挨拶
パナソニック教育財団
理事長　小野元之 氏

来賓ご挨拶
文部科学省総合教育政策官
社会教育振興総括官
寺門成真 氏

プレゼンター
フォーラムメンバー
入江杏 氏

幹事総評
フォーラムメンバー
工藤啓 氏

最後に、フォーラムメンバーで幹事の工藤啓氏（NPO法人 育て上げネット 理事長）より次のような総評をいただきました。「大人が子どもたちのために創意工夫をする一方、子どもたちのほうが技術に強く、大人にインターネットの使い方を教えてくれることもあります。このように子どもだけでなく、大人のこころも育まれるような “相互の育み” が生まれる取り組みが、今年度は多かったと感じます。誰かの悲しみに寄り添う活動、互いに伴走する活動、親身に対話を重ねる活動。そこから育まれる多くのストーリーや子どもたちの笑顔、言葉。それらを大切にして、7団体を選びました。この受賞が少しでも皆さまの活動の支えとなることを期待します」。

オンライン座談会
「これからの“子どもたちのこころの育み”とオンライン活用」

表彰式に続き、フォーラムメンバーの工藤氏、入江氏、および受賞団体の代表7名により、オンライン座談会「これからの “子どもたちのこころの育み” とオンライン活用」が開かれました。インターネットの活用に関する現場の生の声を聞きながら、そのメリット、デメリットに関して活発に意見を交換しました。

活用の現状としては、活動予定の告知や出欠にウェブやSNSを活用している団体が多く、「コロナ禍で子どもたちのやる気を引き出すため大学のホームページを活用して活動の様子を配信した」、「無人島学校の様子を家で待つ親向けにライブ配信している」など、ウェブ配信の事例も複数ありました。

また、Facebookでの情報発信メリットを感じている団体が多く、「活動を知った遠隔地の人からお米が送られてきた」、「県外にいる支援者もグループの活動に参加できる」、「情報を取りに行きたい人が取りに行ける」といった声が聞かれました。

一方、デメリットとしては、「オンラインで会話はできるが、相手の想いまで汲み取るような対話は難しいと感じる」、「細かな表情までは読み取れず、意思の疎通に不安が残る」といった意見が聞かれました。今後はウェブでの講演会を企画したいという声も上がりました。

パネリスト

工藤啓氏、入江杏氏、受賞団体代表7名

（北海道）学童における感染症予防教育研究班	大浦 麻絵 氏
（山形県）三川町中高生ボランティアサークル 来夢来人	菅原 知子 氏
（大阪府）一般社団法人 できわかクリエイターズ	藤井 智代 氏
（大阪府）一般社団法人 HOMEステーション	南　延夫 氏
（兵庫県）特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫	山崎 清治 氏
（島根県）特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター	中島 紋子 氏
（福岡県）いいづか人材育成グループ『ユリシス』	田渕 真穂 氏

※表彰式およびオンライン座談会の動画は、ホームページでご覧いただけます。

2020年度子どもたちの“こころを育む活動”表彰 受賞団体

全国大賞	特定非営利活動法人　おやこ劇場松江センター（島根県）	P6
優秀賞	学童における感染症予防教育研究班（北海道）	P8
	三川町中高生ボランティアサークル　来夢来人（山形県）	P10
	一般社団法人 できわかクリエイターズ（大阪府）	P12
	特定非営利活動法人　生涯学習サポート兵庫（兵庫県）	P14
	いいづか人材育成グループ『ユリシス』（福岡県）	P16
奨励賞	一般社団法人　HOMEステーション（大阪府）	P18

受賞団体 活動紹介

全国大賞

特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター【島根県】

げきじょっこまつり　初めてのお買い物

選考理由　「初めてのお買い物」を通して幼い子どもたちの自立心やコミュニケーション力、社会性が育まれています。家族も新たな気づきを得ることで、子どものこころの尊重につながっている点が高く評価されました。

活動の概要と目的

1人で買い物をするワクワク感とともに、自主性と物を大切にするこころが育まれています

37年間続く「げきじょっこまつり」のメイン企画「ドン券バザー」は、子どもたちだけで楽しめるおもちゃのリサイクルフリーマーケットです。自主性と物を大切にするこころを育むことを目的に、大人は口出し禁止とし、自由な買い物の場を提供しています。毎回200~300人が集う会場で、子どもたちは通貨である「ドン券」を使い、1人200ドン（独自の通貨）を考えながら使います。商品は使わなくなったおもちゃたちで、なかには次に使う人へ、こころのこもった手書きの説明書がつけられていることもあります。また、準備期間は親同士の交流の場となっており、前日には子どもたちもお手伝いします。ほしいおもちゃを見つけ、自分だけがわかる位置に置く工夫も楽しみの一つになっています。

買う側の幼児や小学生は、自主性と物を大切にするこころを育み、売り子となる中高生は支える喜びなどを通して成長。親側は見守ることで我が子の成長に気づくことができ、子どものこころの尊重にもつながっています。

買い物に1人でチャレンジする女の子を、大学生の売り子がやさしくサポート。教員を目指す大学生ボランティアにも、貴重な学びの場になっています。

1人で買い物をするワクワク感や困ったときに人に頼ること、友達とのおもちゃの取り合いや譲り合い、お金のやりくり。いろんな経験が詰まっています。

子どもたちの変化・成長

子どもたちは、1人でおもちゃを選び、売り子に声をかけ、通貨を考えて使うことで自主性を身につけており、おもちゃを大切にするこころも生まれます。中高生は、売り子になることで幼い子を支える喜びを感じ、成長しています。

参加者の声

- 自分が使わなくなったおもちゃを友達が選んでくれたのが、うれしかった。「あ～、楽しい1日が終わらないで～」って思ったよ。（小学生）
- 小一の娘のうれしそうな姿を見て私もうれしくなりました。下の子が買った電車は、心のこもった手書きの説明書入りでした。（小学生と幼児の母）
- 同じおもちゃを取り合って譲ったり譲られたり。その後その子と仲良くなって家を行き来する友達になったこともありました。（小学生の母）
- 幼い子どもたちが、小さな手で大きなおもちゃを持って声をかけてくれたときは、自分もこんな感じだったかなと懐かしく思いました。（中学生）
- 子どもたちが自由に買い物をして喜ぶ顔を見て愛しかった。経験した喜びが、次の子どもたちに引き継がれることに深さを感じました。（高校生）
- 会場準備を手伝う我が子が、大切にしてきたぬいぐるみなどを明日から必要か、小さい人が喜ぶかと悩み、供出する側に。（子どもが小さいとき参加）

今後の課題と未来の方向性

ドン券バザーを経験した子どもたちが運営に携わり、楽しく過ごした自らの経験を次の世代に引き継げる仕組みを整えたいと考えています。また、活動により多くの子どもたちが参加できるように、ほかの団体や行政とも協働しながら松江市全体での取り組みを目指しています。今後も、新型コロナウイルス感染症予防において、徹底した対策を実施したうえで開催を続けていく予定です。

活動の特長

37年間継続できたのは、楽しさと成長を実感できるから

1983年から毎年実施されている「ドン券バザー」は、近年では毎年約200~300人が参加する盛況ぶりです。ここで子どもだけが使える「ドン」は、子どもたちに経済や社会に触れる経験とこころの成長をもたらすプライスレスな通貨となっています。長く続く理由は、子どもたちが買い物を存分に楽しめているからであり、経験を通した成長が子ども自身にも周囲の大人にもしっかりと実感できるからです。

準備段階からの交流や事前に行う工夫で、期待度もアップ

準備期間中は事務所におもちゃを集め、「ミニカー10ドン、ぬいぐるみ20ドン」と200ドンで思いきり買い物ができるよう実行委員で値段をつけます。子どもたちの喜ぶ顔を想像しながら準備は進み、日々の子育ての話などをしながら次第に親同士も交流が深まります。まつり前日には子どもたちも一緒におもちゃを並べ、お店をつくります。その際、買いたいおもちゃを自分だけが分かるように隠しておく工夫も楽しみになっており、まつりの準備によって買い物への期待感がアップしています。

買いもので自主性を育み、後に支える側に

子どもたちはよく考えて制限内でほしいものを選び、買い物をすることを学びます。しかし、初めての買い物ではとまどうことも多く、何をどう選んでいいかわからない子や、売り子に声をかけられない子もいます。親ではない人に助けてもらいながらの買い物です。売り子の中高生、大学生は自らの経験から気持ちを察し、手を差し伸べることができており、年齢とともに違う立場から経験を積み重ねて成長しています。

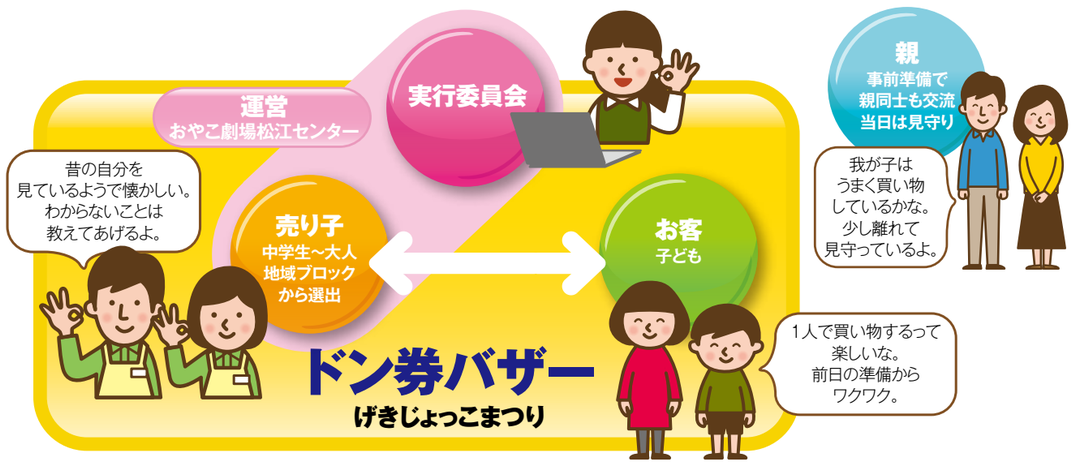
いろんな人に助けられながら一人で買い物をする我が子を見守ることで、親も成長していきます。

さまざまな人の協力で、会場に集まったおもちゃたち。大切にする思いがバトンタッチされていきます。

買い物をする子どもたちは、昔の自分のよう。気持ちがわかる上級生や大人が支援する、長寿企画に成長しました。

活動の広がり

年に一回開催する「げきじょっこまつり」内で行う「ドン券バザー」は、37年継続している名物企画。初めて自分だけで買い物をする喜びを経験した子どもは、成長して売り子を経験し、さらに成長して教員や親になるなど、支える側へも展開されます。さらに今後は、松江市全体のおまつりにできるよう行政や他団体との協働を目指しています。



開催までのスケジュール

10月	実行委員を選定（約10人）
11月	実行委員会を開催
12月	おもちゃの収集・呼びかけ 参加者募集
1月	おもちゃの値段付け・整備・修理
2月	開催。近年は200~300人参加

連絡先
●所在地：〒690-0874島根県松江市中原町71番地　●TEL：0852-22-4937
●E-mail：oyakomatsue@gmail.com　●ホームページ：https://blog.canpan.info/oyakomatsue/
●代表者：中島紋子（理事長）　●担当者：藤井浩子（事務局長）

優秀賞

学童における感染症予防教育研究班【北海道】
子ども達から市民へ届ける感染症予防啓発活動

選考理由　子どもたちが感染症予防に主体的に取り組むために、さまざまな工夫が凝らされ、社会生活における個々の責任感が育まれています。公的機関や企業など多くの団体と連携し、活動の場を拡げている点なども高く評価されました。

活動の概要と目的

正しい感染症予防策を身につけた子どもたちが積極的に地域の公衆衛生を牽引

エビデンスに基づく感染症の知識を学び、予防の必要性を実感した子どもたちが、市民に向けた予防策の発信や普及に主体的に取り組んでいる活動です。

子どもたちには、人に助けてもらうだけでなく「自分にできることをする、市民への啓発活動に携わる」大切さを知り、社会への参加意識を高めてもらうことを期待して活動を展開しています。

感染症予防へのニーズが高まるなか、研究班は道内の小中学校や幼稚園の依頼に応え、感染症予防の出前授業等を数多く実施しました。授業を受けた子どもたちは、感染症予防の必要性を実感し、正しい知識や対策を知ってもらうために「ポスター&川柳コンクール」や感染症クイズの動画作成などを通して予防啓発活動に積極的に参加。子どもたちが興味深く学べるように産官学が連携し、サポートを行っています。

活動の経験は、子どもたちのこころに自主性と社会性、自己肯定感を自然な形で育んでいます。

感染症予防について出張授業で学んだ小学生たちが、新型コロナ感染防止○×クイズを作成している様子です。(伏見小学校)

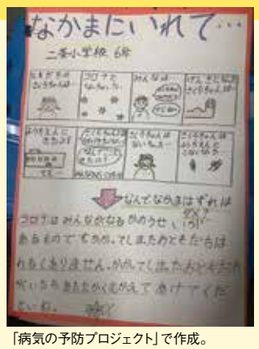
感染症への理解を深め、啓発活動をサポートする「病気の予防プロジェクト」の授業風景。当日はNHKによる取材が行われました。(二条小学校)

子どもたちの変化・成長

子どもたちは、感染症対策の正しい知識を体得。手の洗い方から感染症にかかった人への差別をなくす必要性まで、地域の人々に伝える活動に参加しています。また、表現や活動を評価されることで、自己肯定感を育んでいます。

参加者の声

手を洗わないとみんなに迷惑をかけてしまうので、いっぱい手を洗いました。泡石鹸は柔らかくてよかったです。(小学5年生)	コロナのせいで色々なことができなくなったけれど、手を洗えばできることが増える気がしました。(小学5年生)
常にマスクをして、店に入るときは手を必ず消毒する。周りにも予防の大切さを訴えていく。(小学6年生)	コロナウイルスにかかった人をわかりやすく描いた小学生の作品を見て、これを見た人は差別をしなくなると感じました。(中学2年生)
ウイルス感染は防ぎきれないかもしれないけど、その差別で誰かを苦しめることは防げる。差別をする人が減ることを祈っています。(小学6年生)	やはり手洗いやマスク、消毒が大切だとわかりました。コロナウイルスに負けないようにがんばって予防していきたいです。(小学6年生)



「病気の予防プロジェクト」で作成。
かかった友達を責めない大切さを表現したツールです。

今後の課題と未来の方向性

活動においては「子どもを主体として、子どもたちが楽しんで取り組めること」「興味を突き詰めていける環境を大人が整えること」を意識して進めています。活動をサポートする側も、研究者や主要メンバーだけでなく、企業や行政とも連携して幅広くさまざまな立場の方々が、温かい気持ちで無理なく関わっていける活動を目指しています。今後は、子どもたちの活動を通して、公衆衛生活動が地域の中で育っていくことを期待しています。

活動の特長

感染症予防の知識を体得し、啓発活動に主体的に取り組む

感染症予防の基本である手洗いのコツを、言葉と連動した動作で覚え、予防の知識をクイズにすることで「何が×で何が○か」をより深く理解しながら、楽しんで身につけています。研究班の出前授業では、どのような形で感染対策の情報を発信すれば相手に届くか、自分たちにできることは何かと、自ら考えたプランを形にして実践することで「言われたことをやる」よりも必要性を実感し主体的に取り組めています。

子どもの興味を喚起し持続させる仕組みづくり

花王がホームページで公表している手洗い歌に着目し、連想ゲームのようなストーリー性のある歌詞を上手な手洗いのコツを覚えるためのキーワードとして幼稚園や保育園、小中学校などに紹介。楽しく子どもたちの生活の中に浸透させています。また、コロナ禍前から続く「ポスター&川柳コンクール」では、展示や表彰をするほか、子ども自身が選考委員になるなど、興味や達成感、自己肯定感が得られる仕組みになっています。

産官学が連携し地域に発信！各メディアも注目

予算を気にせず手洗いをしてもらうため、花王の泡石鹸を1年間配給する「手洗い徹底プロジェクト」を市内の小中学校や幼稚園、保育園で実施し、同社とは遠隔手洗い授業でも協働。また札幌市保健所の協力で市民向けのコロナ対策クイズを行い、市内公共施設で動画配信しました。「ポスター&川柳コンクール」の展示にも公共施設が協力。これらの活動は新聞やテレビなどで紹介され、道内外から注目されています。

泡石鹸で手を洗う様子。冷水では石鹸の泡立ちや泡切れもやる気に影響します。壁に要点ポスターも。(南月寒小学校)

「ポスター&川柳コンクール」札幌医科大学での表彰式。受賞者のやる気アップと、受賞への憧れにつながります。

札幌ドームの大型ビジョンで、子どもたちによる新型コロナ感染防止クイズが流され、新聞にも掲載されました。

活動の広がり

札幌医科大学の感染症予防教育研究班による取り組みは、市内の児童会館における感染症予防教育を目的として2017年にスタート。2019年以降は、道内の幼稚園や小中学校の子どもたちを中心に活動を展開し、企業や行政とも協力して産官学の連携による円滑なサポートが実現しました。また、県外からの依頼も寄せられており、高知県の小学校でも活動が展開されるなど、広がりを見せています。

連絡先
●所在地：〒060-8556北海道札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学医学部公衆衛生学　●TEL：011-611-2111
●E-mail：aoura@sapmed.ac.jp
●代表者／担当者：大浦麻絵（研究代表者）

優秀賞

三川町中高生ボランティアサークル　来夢来人【山形県】

地域に根ざした、中高生の“恩返し”活動

選考理由　園児との交流を通して、地域への恩返しのこころや、思いやりのこころが育まれています。町内の中学校が1校しかないにもかかわらず32年続いており、地域にしっかりと根づいているところが高い評価を得ました。

活動の概要と目的

育ててくれたわが町、三川に中高生がボランティアで恩返し

三川町の中高生が、自分たちを育ててくれた地域に対して恩返しの気持ちで取り組んでいるボランティア活動です。「来夢来人」は、県の青少年ボランティア組織に所属する有志のサークルで、三川町において1988年から32年にわたって受け継がれてきました。現在は町立三川中学校の生徒を中心に卒業生を含めた40人が所属し、交流を深めています。

中心となる定期活動は、保育園・幼稚園での清掃と園児たちとの遊びを通じた交流で、年に10回の訪問活動が15年以上継続しています。ほかにも、子育て支援センターでの清掃や紙芝居の読み聞かせ、町内のお祭りをはじめとしたイベントへの出店や運営補助など、地域に根ざした活動を年間15回ほどのペースで実施しています。予定の調整は、参加する生徒たちの希望を優先しながら、町の社会教育係が担当しています。

三川町の中高生たちには、園児を思いやるやさしいこころが育まれるとともに、地域の役に立ち感謝の言葉をかけてもらうことで、自己肯定感や地元愛が生まれています。

子育て支援センター内にある学童保育所の窓を、みんなで手分けして清掃しています。表情は真剣そのものです。

子育て支援センターで、子どもたちに紙芝居を披露している様子です。来所する方々との交流とともに、施設内の清掃や消毒なども行っています。

子どもたちの変化・成長

活動に参加した中高生は、保育園や幼稚園の子どもたちと楽しく遊ぶなかで思いやりのこころを育んでいます。また、町のイベントに参加し協力することで町への愛着を感じ、受け取る感謝の言葉に達成感や自己肯定感を得ています。

参加者の声

たくさんの人に「ありがとう」と喜んでもらえました。体験を将来に生かし、地域に貢献できるようにがんばりたいです。（中学2年生）	学年関係なく楽しく活動でき、メンバー同士仲良くできて良かったです。とても楽しかったので、来年以降も続けていきたいです。（中学2年生）
中学最後の年は受験とコロナであまり参加できなかったけど、高校でも参加し、より明るいグループになるようにがんばりたい。（中学3年生）	人の役に立てて良かった。「ボランティアは楽しくない」と思っていたけど、やってみると意外に楽しいと感じることができた。（中学1年生）
普段関わらない人とも話したり遊んだりして楽しかった。サークル独自のイベントで仲間と協力できて、来年もやりたいと思った。（中学1年生）	たくさんの人の笑顔を見ることができました。三川町がよりよくなるように、高校生になっても来夢来人に参加し続けたいです。（中学3年生）

今後の課題と未来の方向性

「地域を活動の中心にする」「自分たちがしてもらったように、小さな子どもたちを楽しませ、手本になる」「自分自身も楽しんで活動する」。三川町の中高生には、大切な3つの姿勢を崩さずにボランティア活動に取り組み、経験を糧に日々生き生きと成長してほしいと考えています。さらに、遊んでもらった子が成長し、ボランティア活動を経て自分の子どもの相手をしてもらうなど、やさしさが循環する町の仕組みが末永く続くことを願っています。

活動の特長

楽しい記憶と思いやりのバトンを繋いで32年

1988年に活動を始めた当初は、町内唯一の中学校と中学を卒業し町外の高校に通う生徒たちのボランティアを通じた交流が目的でした。活動を32年にわたって続けてこられたのは、参加する中高生たちが活動を楽しめていることと、無理のない予定で参加できること、活動が学年や学校の枠を超えた仲間づくりの場になっていることが理由であり、今後の継続も期待されます。

自分自身が楽しいから、続けられる

中高生たちは、保育園・幼稚園を訪問しては「懐かしい！」と声をあげ、当時を懐かしんでいます。園児たちと遊ぶうちに、子どもに信頼され慕われていることを感じて自信や責任感が生まれ、楽しさや愛おしく思う気持ちとともに成長しています。町内のイベント協力も含め、かけられる「ありがとう」という言葉から自己肯定感が育まれ、“誰かの役に立つ”喜びを経験しています。

自主性と希望を大切に調整・連携のサポート

中高生たちによるボランティアは、部活動や勉強以外にさける貴重な自分の時間を使うことになります。そのため、予定を調整する側は、一人ひとりの希望を尊重し、活動の時間が楽しく有意義な経験になるよう考えてスケジュールを組んでいます。また、依頼を受ける活動先とも常に情報交換し、円滑に活動をコーディネート。参加する生徒たちが楽しいと思える環境を支えています。

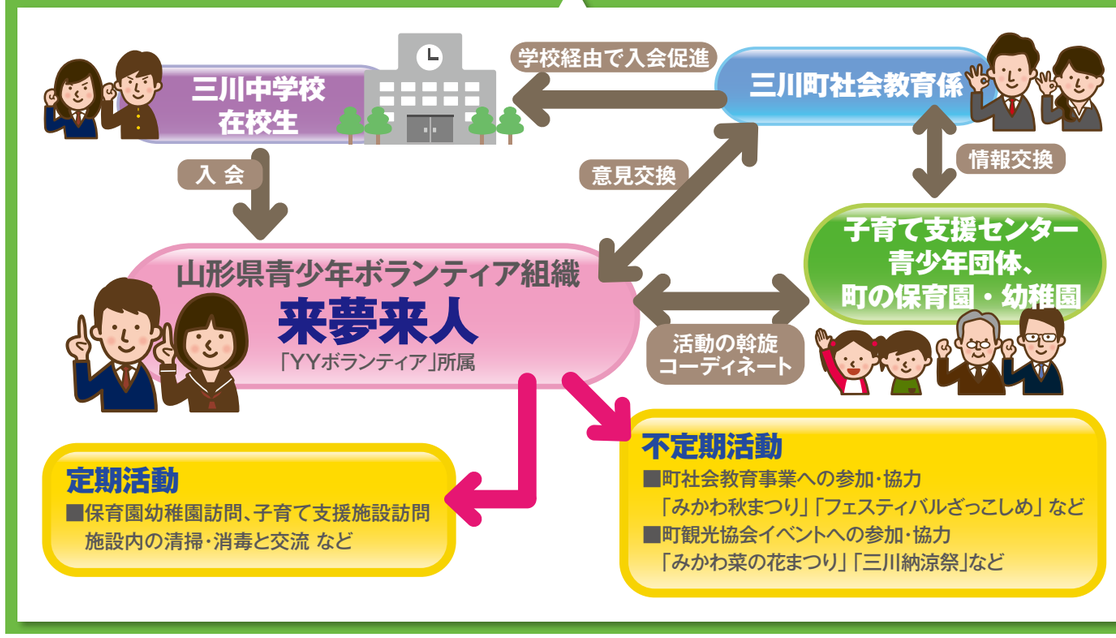
保育園・幼稚園への訪問ボランティアで、子どもたちとスポンジの積み木を使って楽しく遊んでいるところです。

「みかわ秋まつり」に出店し、来場者にバルーンアートをプレゼントしました。

ハロウィンを町の人に楽しんでもらおうと、写真撮影用の背景イラストやフレームを手作りしました。

活動の広がり

三川町の中学生たちは、ボランティア活動を通して町外に通う高校生の先輩や保育園・幼稚園の子どもたち、町のイベントで出会う大人たちなど、さまざまな年齢の人々と関わりながら成長していきます。さらに県の「YYボランティア」では、他地域のボランティア仲間と一緒にセミナーを受けたり、活動を発表したりしながら刺激を受け、交流を深めています。



連絡先
●所在地：〒997-1321山形県東田川郡三川町大字押切新田字桜木8-1　●TEL：0235-64-8310
●E-mail：kouminkan@town.mikawa.yamagata.jp
●代表者：片桐未夢（代表）　●担当者：菅原知子（事務局）

優秀賞

一般社団法人 できわかクリエイターズ【大阪府】

重度障がい児者の「できる」、「わかる」、をICTで可能にする

選考理由　重度障がい児のコミュニケーション力とアビリティを拡げることで子どもたちの感情を豊かにし、意欲を喚起しています。家族の意識にも変化を与え、社会とのつながりや絆を強めている点でも、未来志向の取り組みといえます。

活動の概要と目的

最新ICT機器で子どもたちの可能を拡げ 家族の意識にも変化を与える

重度の障がいを持つ子どもたち、とりわけ重度の身体障がいと重度の知的障がいを併せ持つ重症心身障がいの子どもたちは、家族や介護関係者などの支援者からも「何もできない」「何も分かっていない」と力を過小評価されることが多いのが現状です。

しかし、近年の技術進歩によって、視線を使って機器を操作する視線入力装置、個々のわずかな動きを感知する入力機器など、重度障がいがあっても「できる」ICT機器が開発され、その環境は大きく変わりつつあります。ただ、そうした機器があることを知らない、知っていても導入の仕方がわからない支援者が大半です。

そこで2019年、自らも重症心身障がい児を育てる藤井智代氏と、作業療法士の引地晶久氏が当法人を立ち上げ、「重度障がい児（HCK）のための最新デジタルツールの講習会＆体験会」をスタート。オンラインも活用し、専門家の協力も得ながら普及に努めているほか、一人ひとりの状態に合わせた個別相談も行っています。

第2回重度障害児（HCK）のための最新デジタルツール講習会＆体験会。当事者と家族、医療関係者、介護関係者、教育関係者、メディア関係者など多数参加しました。

共同代表の作業療法士・引地晶久氏がサポートする視線入力体験ブースで、視線入力に初めて挑戦し、笑顔を見せる女の子。

子どもたちの変化・成長

ICT機器の活用によって子どもたちが「できる」ことが拡がり、できると「わかる」ことで支援者の関わり方も変化します。そのことが子どもたちの力や自己肯定感を育み、「もっとやりたい」という意欲を引き出しています。

参加者の声

子どもはちゃんとわかっていて、小さい反応でいろいろ家族に伝えてくれていた。それが今、機器を使うことで初めて形になりました。（当事者家族）	オンラインで90人以上の方とつながれたことが初めての経験でした。これだけの人たちがいるなら、私もやってみたいと思いました。（当事者家族）
いつも移動や宿泊のことを考えないといけないですが、自宅から参加できたことがとてもうれしかったです。世界が拡がった気がします。（当事者家族）	伊藤先生の「今できないからといって諦めない、常に希望を持つ」との言葉が、今後もがんばってみようという心の支えになりました。（当事者家族）
誰も取り残さず、全員で一人ひとりの子どもたちのことを考える雰囲気が素晴らしい。自分も勉強し、広められるように尽力したいです。（医療関係者）	テクノロジーの進化は目覚ましく、重度障害のある子どもも社会参加の可能性が確実に広がっていることを知ることができました。（メディア）

今後の課題と未来の方向性

講習会と並行して、個々に合わせた機器の選定、フィッティングをサポートする訪問事業に力を入れます。また、大学や養成校と連携して授業にICT機器を取り入れてもらい、取り組みを学会で発表して普及に努めるほか、専門家と共同で重度障がい児者が活用しやすい機器やソフトも開発していく予定です。一人でも多くの重度障がい児者にICT機器の可能性を伝え、障がい者の社会参加や教育の機会を増やしていきたいと思います。

活動の特長

ICTで拡がる子どもたちの可能性と未来

活動では、重度障がい児が自分の意志を外に伝えるための手段として、アイトラッカー、ボタンスイッチ、iPadなどのICT機器の使い方をレクチャー。その人にどの機器が適しているか、どのように訓練していけばいいか、一緒に考えていきます。その結果、家族から、「子どもとコミュニケーションがとれた」「できることが増えた」という喜びと感謝の声がたくさん寄せられています。

大学や企業から先駆者を講師に招いて講義

講習会は、視線入力研究の第一人者である島根大学総合理工学研究科の伊藤史人氏、現役の教諭でさまざまな障がい児支援の経験を持つ福岡市立今津特別支援学校の福島勇氏、視線入力ソフトの開発・販売を行っている株式会社ユニコーンの中島勝幸氏など、各分野の第一線で活躍する専門家の協力を得て行っています。この協力体制によって、さまざまなニーズの講習会の開催、個別相談時には多方面からのアプローチも可能になっています。

国内外から多数参加するオンライン講習会

2020年はコロナ禍によってオンライン講習会となったことで、これまで会場に行きたくても行けなかった重度障がい児やその家族が、家で医療処置をしながらでも参加できるようになりました。また、以前は関西圏からの参加が主でしたが、一気に全国へと拡大。海外居住の人も含め延べ500名が参加し、大きな反響がありました。

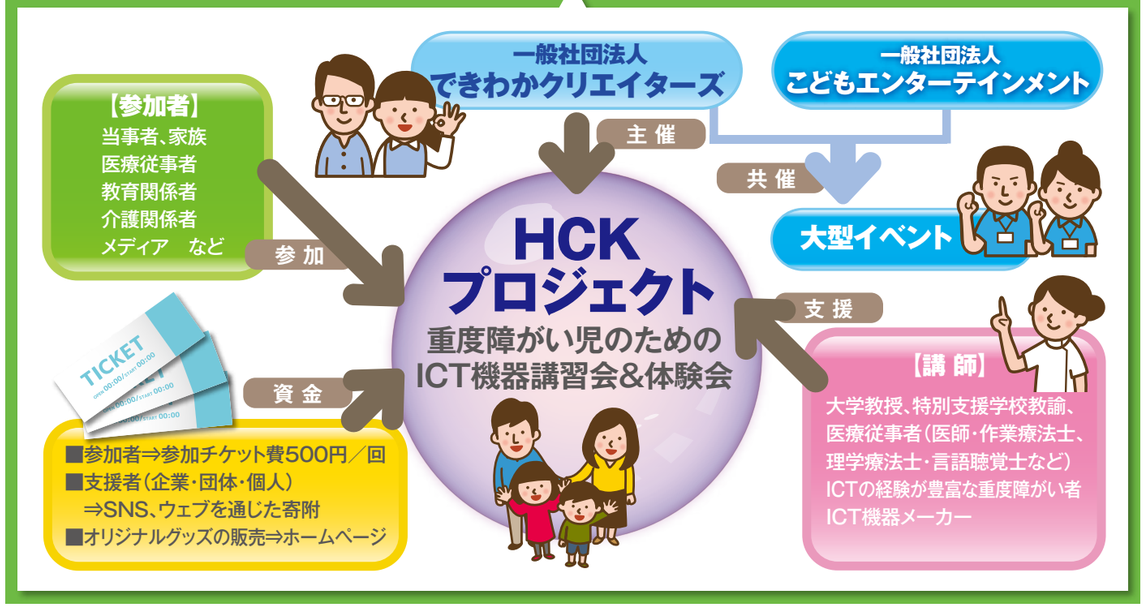
重度障害児でも使えるiPadのアプリや活用法を学ぶ親子。スタッフが一人ひとりの状態に合った機器を提案します。

2020年6月、第3回プロジェクトオンラインで島根大学・伊藤史人助教が講演。約150名が参加しました。

島根大学の伊藤史人助教が開発した視線入力アプリEyeMoTぬりえを使って、オンラインでぬりえ大会を開催。

活動の広がり

当初は「重度障がいの子に機械は使えない」という固定観念を持つ支援者が多かったものの、回を重ねるごとに意識が変わってきました。最初はできなくても、できるようになった子どもの支援者が、経過の動画をFacebookに上げるなどして広げてくれるためです。講習会の参加者は当事者、家族、医療従事者、教育関係者、介護関係者など、多分野の人に及びます。参加チケットは500円。大きな体験イベントを開催する際には、一般社団法人こどもエンターテインメントと共催で行っています。



連絡先
●所在地：〒567-0006　大阪府茨木市耳原1丁目17-33-5　●TEL：070-2196-8851
●E-mail：dekiwakac@gmail.com　●ホームページ：https://dekiwaka.com
●代表者／担当者：藤井 智代（代表理事）

優秀賞

特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫【兵庫県】

生きる力を身につける「無人島学校」

選考理由　過酷な体験を通して、自分の感情と向き合うことや自分で考え行動すること、当り前のことに感謝する気持ち、命の大切さに対する意識、共同生活における社会性、実生活における生活力などが育まれています。

活動の概要と目的

自立心を育む1週間のサバイバル生活
テーマは仲間と自給自足で1日3食を食べること

2007年より、子どもたちの自立心を育むことを目的に7泊8日の無人島生活をする体験活動「チャレンジアイランド」を夏休みに行っています。電気も水道も建物もない無人島に持ち込めるのは水と米と鶏のみ。それ以外は自給自足で1日3食を食べることがテーマです。

参加者は毎回約50人で、5~7人のグループで行動。決まったプログラムや役割は何もなく、子どもたちは自分の存在意義を見つけるため、仲間に「ありがとう」を言われようと、自ら動き始めます。さまざまな困難にぶち当たりながら仲間と過ごす、1週間のサバイバル生活。長く過酷な体験を通して自分と向き合う中で、いつしか普段の生活でも多様な「ありがとう」で自分が生かされていることに気づきます。

2020年はコロナ禍で夏休みが短縮したため、1~2泊の短期間、少人数定員で数回に分けて実施しました。事業開始から現在までに延べ1000人以上の小学生から大学生までの参加者を動員しています。

最終日まで無人島で暮らした仲間とチャレンジ達成の記念撮影。1週間前とは何かが違う自分がいます。

米以外は現地調達のため、漁をしないと生きていけません。朝から日が沈むまで、素もぐりや釣りでの漁が続きます。みんな自分の役割を見つけようと必死です。

子どもたちの変化・成長

自分ができることを探す、他人のために動く、失敗を気にせずチャレンジする、当たり前の生活に感謝するなど、体験中もその後も、自立に向かってじわじわと変化します。無人島生活は思い出ではなく、ターニングポイントになっています。

参加者の声

電気も水道もガスもない初めての生活だったけど、楽しかった！無人島のトイレは大変だった。トイレの水が流れるって素晴らしい！（小学生）	海の水は冷たかった！海で生きている魚を捕るのは大変だということがよくわかった。みんなで作ったご飯はすごくおいしかった。（小学生）
これまで小さい失敗をずっと気にしていたけど、無人島で山ほど失敗して、小さい失敗をずっと引きずらなくなった。（小学生）	帰ってから弟たちに優しく、リーダーっぽい振る舞いをしています。「無人島に嫌な気持ちは全部置いてきてん」と話していました。（保護者）
今の生活は当たり前ではないと感じているようす。食べ物にも感謝の気持ちを持つようになり、内面がすごく変化していると感じます。（保護者）	初めての無人島、初めてのボランティアでしたが、純粋で素直で一生懸命考えて行動する子どもから刺激をたくさん受けました。（大学生ボランティア）

今後の課題と未来の方向性

自発的な行動や学びを生み出すには、1週間以上の開催期間を設けることが望ましいものの、今後の夏休み期間の動向によっては難しくなります。次年度以降は無人島生活の体験だけでなく、体験後の子どもたちそれぞれの成長、日常生活の変化についてオンラインサービスを利用して個別にコーチングし、参加者一人ひとりが必要としている「生きる力」を身につけていくことを徹底したいと考えています。

活動の特長

応募から事後研修まで、徹底して育てる「生きる力」

毎回、応募動機の作文審査から始まり、本人との面談で参加の決意を確認し、約50人の参加者を決定。親に言われてではなく、本当に行きたい子どもたちを集めます。事前研修で学ぶ、テントの張り方、魚の捌き方、火の起こし方などの自給自足のための手法は、実生活でも役立つものです。そして事後研修では、親子で体験を振り返ることで、日常生活の態度・行動の変容へとつなぎます。

鶏を食べるか、食べないかの決断も自分たちで

無人島には非常食として鶏を連れて行きます。1週間世話をして暮らし、雨で漁ができない日には鶏が生んだ卵を食べ、7日目にはその鶏を食べるか、食べないかを決める「命の話し合い」を行います。決定は全員一致が条件。そこで食べることが決まった場合は、鶏を絞めてその命をいただきます。結果はその回によって違いますが、泣きながらも食べる決断をする回もあります。

コロナ禍でいっそう重要になる子どもたちの「自立」

コロナ禍で人との距離が広がり、ITで職業や働き方が変化しようとしている今、子どもたちの「自立」はますます重要になっています。人との関わりの中で、自分はどう考え行動していくのか、自己決定する力が必要です。自発的な行動が生まれるのは、決まってアクシデントや困難にぶち当たった時。人間社会の原点でもある無人島生活は、そうした本来の人のあり方を学ばせてくれます。

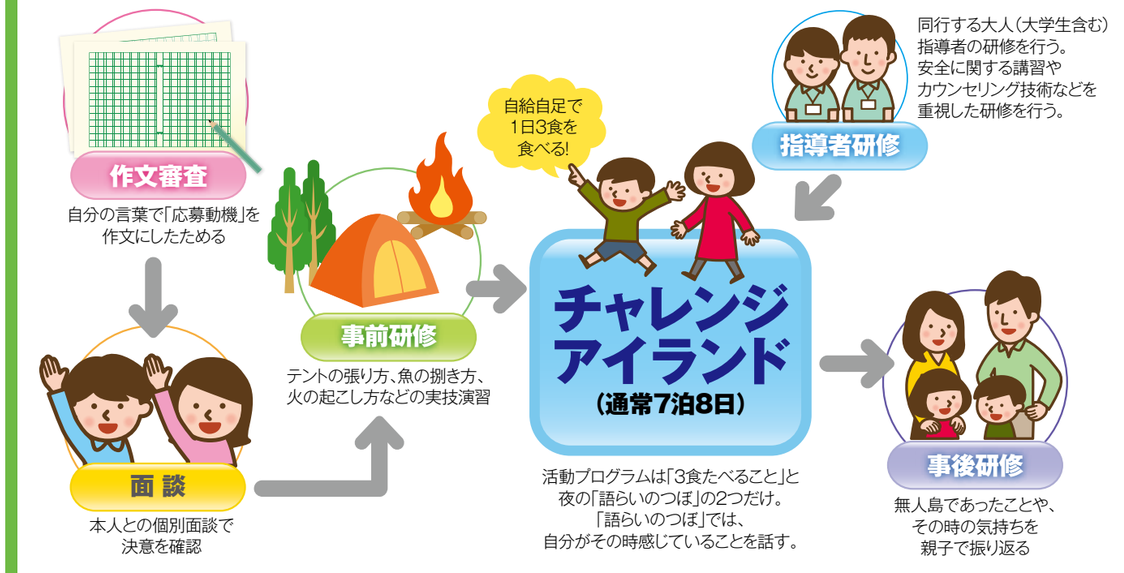
ようやく魚が釣れたら、自分たちで料理。事前研修で魚の捌き方を学び、家で練習してきたので腕の見せ所です。

1週間共に暮らした鶏を食べるか、食べないか。究極の決断は自分たちで下します。

決まったプログラムはなく自由なはずなのに、ずっと食事のことをしている気がします。朝から晩まで、浜辺での野外炊事がひたすら繰り返されます。

活動の広がり

基本的には参加費収入によって運営していますが、プログラムが長期間にわたり、事前・事後研修会なども実施するため、どうしても費用が高くなります。そこで今年度より「ひとり親家庭参加費」と「就学援助家庭参加費」を設定し、安価でできる仕組みを作りました。差額は「CAMP FOR ALL基金」を創設し、資金を募っています。人材面は、生涯学習サポート兵庫の専任スタッフのほか、大学生ボランティアも参加しています。



連絡先
●所在地：〒672-8088兵庫県姫路市飾磨区英賀西町2-15-2　●TEL：079-230-0661
●E-mail：info@shosapo.jp　●ホームページ：https://shosapo.jp
●代表者：山崎 清治（理事長）

優秀賞

いいづか人材育成グループ『ユリシス』【福岡県】

中高生が継続して実践する外国人支援をはじめとした地域貢献

選考理由　異文化交流を通して共助のこころや、多様性を尊重するこころが育まれています。独自の事業を立ち上げるなど意欲的に活動し、これからの日本を担う子どもたちの独創性が養われている点も期待されます。

活動の概要と目的

海外研修の共通体験を活かしてボランティアグループを組織 在住外国人に寄り添い、地域課題の解決に挑む

飯塚市では、行政主催による中学1年生から高校1年生までを対象とした海外研修事業を行っており、毎年約20名の中高生が姉妹都市のアメリカ・サニーベール市を訪問しています。一方、飯塚市には、3つの大学と外国人技能実習飯塚研修センターが立地していることから、留学生や技能実習生など多くの外国人とその家族が居住しています。そこで、海外研修に参加した中高生が体験を活かすべく、ボランティアグループを組織し、「地域貢献」「異世代間交流」「国際交流」をテーマに活動しています。

来日間もない外国人支援や異文化間交流を目的とした日本語教室の運営補助をはじめ、地域での祭りや交流イベントの企画立案、地域課題の解決に至るまで多彩な活動を創意工夫しながら10年以上継続。活動実績は土日を中心に年間約50日に及びます。長期にわたる継続的な活動を通して、グローバルな視点で地域に貢献できる人材が育っています。

日本語教室は乳幼児同伴での参加が可能。中高生が子どもたちのお世話をすることで、外国人親子が日本のコミュニティに馴染むきっかけとなっています。

地域の祭りに「お国料理バザー」を出店。中高生メンバーが露店に立ち、在住外国人が作るお国料理を販売します。外国人と地域の人を食で結ぶイベントです。

子どもたちの変化・成長

子どもたちは活動を通して国際感覚やコミュニケーション能力、相手を思いやるこころなどを育んでいます。留学をして国際的な仕事に就く人や、地域活性化に興味を持ち、大学卒業後に自治体職員になる人もいます。

参加者の声

身近でできる国際交流を続けてきたことで状況に応じた対応ができるようになった。（高校3年生）	さまざまな国の方と接する機会がたくさんあるため、多国の言語や文化に興味を持つようになった。（中学3年生）
私が中学生の時に仲間と設立したグループの活動を後輩たちが続けてくれていてうれしいし、頼もしく感じる。（OGメンバー）	中高生といろいろな体験ができて、日本での生活が楽しくなった。（在住外国人）
イベントで知り合った子どもたちと私生活でも交流するようになって、とても楽しい。（在住外国人）	学校生活では経験できない活動を中高生が自主的に企画しており、今後も継続してまちの活性化につなげてほしい。（大人スタッフ）

今後の課題と未来の方向性

設立当初の中高生メンバーで県外の大学へ進学した人が地元にUターンし、社会人となって再度グループ活動に参加する、県外在住のOB・OGメンバーも帰省時に参加するなど好循環が生まれています。将来的には、中高生メンバーとして参加していた熱い想いを持ったメンバーが大人スタッフとなり、グループ運営することで永続的な活動とし、地域活性化の一翼を担っていきたいと考えています。

活動の特長

海外研修で培ったボランティア精神と結束力が強み

メンバー全員に海外研修という共通体験があり、研修でのさまざまな経験を通じてボランティア精神を培っているため結束力が強いのが特長です。十人十色の背景を持つ人々との交流を通し、「自ら学び、感じ、成長していくこと」「できる人が、できる時に、できることを」を合言葉として無理なく楽しむことを設立当初から大切にしています。

外国人と積極的に交流し、独自のイベントも企画

アジア内陸部出身の留学生から「海で遊んだことがない」「生の魚を食べたことがない」と聞き、中高生メンバーが海洋体験事業を企画。地引き網や魚捌きの体験イベントを実施し、参加した外国人から大好評を得ました。資金面では、行政の補助金等に頼らず、民間財団が公募する助成事業を活用したり、地域の祭りでバザー販売を行ったりして、持続可能な活動を目指していることも特長です。

国際交流活動にとどまらず、地域課題の解決にも挑戦

国際交流という単独の活動にとどまることなく、地域が抱える課題にも着目。市民やボランティア団体を巻き込みながら、地域課題の解決に10年以上挑戦しています。その一つが成人式。中高生メンバーが運営に関わるようになって式典の雰囲気がよくなり、新成人が問題行動を起こすことが少なくなりました。母校の制服を着た後輩を見て、心が和むようです。他の地域にも広がってほしい貴重な取り組みです。

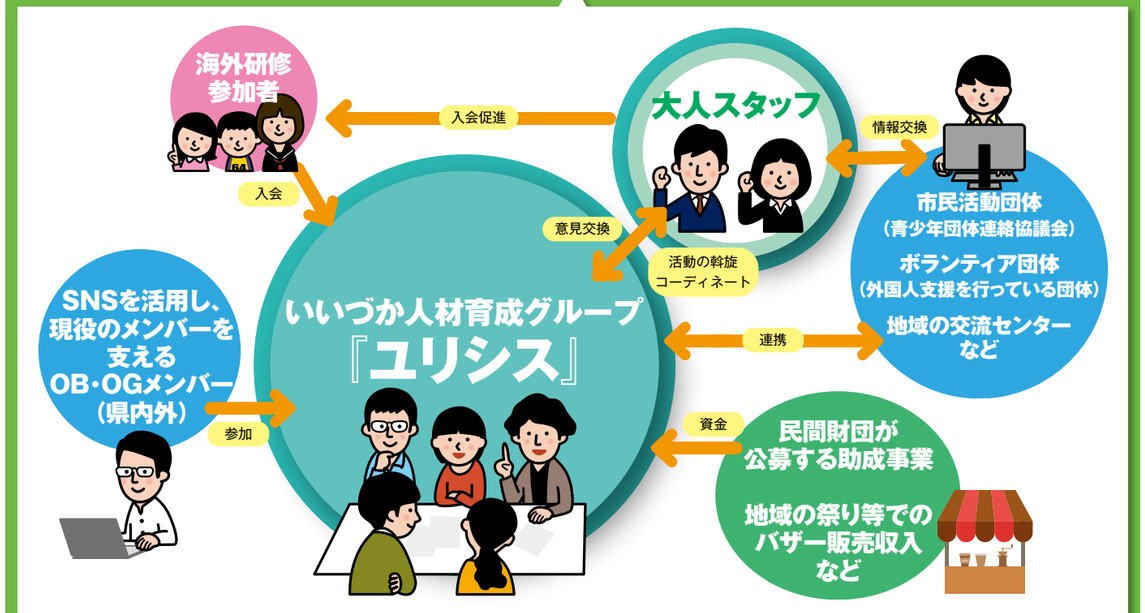
月2回開催の日本語教室で外国人のサポートをする中高生メンバー。外国人と直に接する体験は貴重です。

自分たちで企画した海洋体験事業で、外国人と魚捌き体験をする中高生メンバー。中高生にとっても得がたい経験です。

成人式で新成人にアンケート調査をする中高生。新成人たちは母校の制服を着た後輩の質問に、快く答えてくれます。

活動の広がり

スタッフは中高生メンバー43名と、OB・OGメンバー18名、大人スタッフ12の計73名。中高生メンバーには、先輩たちが立ち上げた活動を継続していこうとの想いが強く、実際、学校では経験できない生身の国際交流ができるため、貴重な成長の機会となっています。進学や就職で地元を離れたOB・OGも、SNSを通じてグループ活動に参加するなど、地域の枠を越えて広がりを見せています。



連絡先　●所在地：〒820-8501　福岡県飯塚市新立岩5番5号 飯塚市役所経済部国際政策課内　●TEL：0948-22-5500（内線1647）
●E-mail：kokusai@city.iizuka.lg.jp
●代表者：松尾 美玖（会長）　●担当者：田渕 真穂（事務局）

奨励賞

一般社団法人 HOMEステーション【大阪府】

フードパスひらの～子どもの居場所と親の余白つくり～

選考理由　地域の人々の協力を得ながら、コロナ禍の子どもたちのセーフティネットとして献身的に活動している点に加え、生活空間の一部として誰もが利用しやすいスーパー内の立地を活用している点も、他にない取り組みといえます。

活動の概要と目的

子どもたちや子育て世代が地域とつながれるように 誰もが利用しやすい立地で開く「みんな食堂」

木曜日と土曜日の週2日、小中学校近くのスーパー(イズミヤ平野店)の一角を利用して「みんな食堂」と子どもの居場所づくり（遊び場提供、補習塾）を展開しています。コロナ禍の休校期間であった2020年5月、地域内で食事や居場所を得にくい子どもたちが急増し、子どものネグレクトや虐待に繋がる恐れが高まったことから、緊急支援プロジェクトとして任意団体「コトナじゅく」と共催で弁当の配布をスタート。その後、7月より「子ども0円の食堂」にリニューアルしました。

ネグレクトなどの虐待を未然に防ぐには、子どもが地域の大人たちと日常的に関係を持っていることが重要です。「みんな食堂」には子どもだけでなく、大学生、社会人、高齢者など地域の人が訪れ、食事のほか、遊びや勉強、休息の場として利用しています。誰もが立ち寄りやすい立地は、子どもたちが関係性の貧困により孤立に陥らないためのセーフティネットとして、また地域の支援者を増やす上でも効果を生んでいます。

食堂は、FREE Wi-Fi、TVゲームコーナー、自習スペースなど子どもの居場所（MANA-viva、ASO-viva）としても開放。

イベント「子どもが作る子ども食堂」で卵を割る子どもたち。他にも季節に合わせたイベントを開催しています。

地域の大学からの学生ボランティアと遊ぶ子どもたち。ここへ来れば、「自分を見てくれる」誰かがいます。

子どもたちの変化・成長

普段は一人で過ごしていたり、下の子の面倒を見ていたりする子どもたちが、お腹とこころを満たせる新たな居場所を得て、自分を見守ってくれる人に出会い、明るく笑顔になっていきます。

活動の特長

食事無料の対象はU25。大学生までサポート

食堂は子どもから高齢者まで誰でも利用可能。大人は一食500円とし、大人一食につき子ども一食分のチケットを作成し、子どもは貼り出されたチケットを利用して食事ができる仕組みです。チケット対象をU25（25歳以下）とすることで、児童だけでなく、コロナ禍でサポートが薄くなりがちな10代から大学生の世代まで幅広くカバーしています。

参加者の声

- 学校でネグレクトの子がいることを知り、興味がわいて来てみたいと思いました。それからは用事がないときは来ています。（小学校6年）
- 友だちとの待ち合わせに使っています。Wi-Fiも使えるし、ごはんも食べられるし、お菓子やジュースもあります！（笑）。（中学2年）
- 家で子どもと2人でごはんを食べていると寂しくなってくるので、こういったところで一緒に食べられるとうれしいです。（シングルマザー）
- 勉強も見てもらえて、お昼も食べられるのはとても助かります！（共働き世帯のママ・学習サポート利用）

今後の課題と未来の方向性

コロナ禍においてはネグレクト防止に重点を置いていましたが、withコロナとなった今、大阪市塾助成を活用し、MANA-viva（学びの場）として学習面、メンタル面に課題の残りがちな中学生のサポートも拡充していく予定です。近隣の大学とも連携し、大学生ボランティアの活動の場としても活用。また、平野区の民生委員や児童委員の人たちと連携し、支援の必要な子どもたちの情報を共有していきたいと考えています。

連絡先
●所在地：〒531-0064　大阪市北区国分寺1丁目6番9号　●TEL：090-8564-2551
●E-mail：homestation.osk@gmail.com　●ホームページ：https://homestationosk.wixsite.com/website
●代表者：／担当者：福住 文子（代表理事）

歴代全国大賞受賞団体 2008～2019年度

※詳しい活動内容はホームページで紹介しています。

2019年度　社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会（大阪府）
テーマ　あなたも私も笑顔になる～子ども福祉委員～

2018年度　特定非営利活動法人 パノラマ（神奈川県）
テーマ　高校内居場所カフェ
～先生でも親でもない大人がいる、文化的シャワー提供の場～

2017年度　長野市立城東小学校（長野県）
テーマ　共に学ぶ長野ろう学校との41年目の交流活動
～共生社会の形成に向けて6年間の継続交流～

2016年度　和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部（和歌山県）
テーマ　地域に根ざし、地域に貢献する高校生リーダーを目指して

2015年度　鹿角市立八幡平中学校（秋田県）
テーマ　郷土愛を育み、人間関係力を培う八幡平ボランティアガイド

2014年度　仙台市立南吉成中学校（宮城県）
テーマ　大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育

2013年度　熊本市立出水南小学校（熊本県）
テーマ　小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動

2012年度　東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊（兵庫県）
テーマ　地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動

2011年度　石榑の里コミュニティ（三重県）
テーマ　地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による組織づくりと協働活動

2010年度　特定非営利活動法人 オバパト隊（熊本県）
テーマ　高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり

2009年度　山形県立置賜農業高等学校演劇部（山形県）
テーマ　農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル

2008年度　公益社団法人 群馬県助産師会（群馬県）
テーマ　子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」